「GSJ 筑波移転」第 6 回

追想 – 筑波移転と研究体制

坂巻幸雄 [1)]

坂巻幸雄（さかまき ゆきお）

1956 年通産省工業技術院地質調査所入所．地質標本館地質標準課長などを経て，1993 年退職．ウラン鉱床の探査技術開発，休廃止鉱山や廃棄物処分場の汚染評価手法の開発などに携わる．1970–1971 年全商工労働組合関信支部委員長．（写真は 1979 年当時）

ドブの口と河田町—地質調査所の「戦後」

先の大戦中，「地質調査所（地調）」は存在しなかった．そこにあったのは「軍需省地下資源調査所」である．1945 年，銀座木挽町（こびきちょう）・歌舞伎座の近くにあった庁舎は 5 月 25 日未明の空襲で焼け，仮庁舎として宛てがわれたのが，川崎市溝の口の旧・日本光学の工場だった 4 階建ての鉄筋庁舎だった（第 1 図）．1956 年に私たちが就職した当時は，迷彩を施した庁舎の最上階は，板壁で仮間仕切りをして職員住宅となり，地階は雨水が溜まったプールに食用蛙が棲み着いていた．駅までの歩道に沿った水路は下水で文字通りドブと化し，酔って転げ落ちる所員も間々現れた．

当時苦労したのが，スポンサーである行政部門（商工省→通産省→経産省）と，ユーザーである鉱業界や大学等との連携である．当時の溝の口は川崎市とは言え，都心との交通は単線部分を残す東急大井町線か国鉄南武線に頼らざるを得ず，所外での会議は事実上 1 日仕事となっていた．そのため外部と係わりの多い鉱床部・燃料部・地質相談所や，企画課・総務課・所長室などの管理部門は，間もなく

第 1 図　川崎市溝の口の庁舎．

1）地質調査所（現産総研地質調査総合センター）元所員

キーワード：筑波移転，団地化，労働組合

第 2 図　新宿区河田町の庁舎．地質調査所百年史編集委員会（1982）より転載．

新宿区（旧・牛込区）河田町に東京分室を設けて，溝の口との二極体制を固めた．もっともこの建物は隣接する東京女子医大の看護師寮だったため（第 2 図），草分け組は男性用トイレの不足に困惑したと伝えられる．

1954 年以降の原子力予算執行に直接関わった私たち（鉱床部核原料資源課）の場合などは，周囲の反対で放射性鉱物用のラボは溝の口に設けなければならなかったために，同じ課の中でも 2 箇所の庁舎をまたいで仕事をこなす日々が続いた．

このような状況下で，幹部・ヒラ所員を通じての一貫した念願は，「庁舎の都内一本化」であった．具体的な候補地としては，上目黒・赤羽や用賀等の旧軍用地などが取りざたされたが，しかし，現実的な進展は全く見られなかった．

今にして思えばそれも当然で，1951 年には工業技術庁（当時）内に研究体制の整理統合・団地化構想 (注 1) の芽生えがすでにあり，科技庁新設勢力等との拮抗の中で，徐々にその方向付けが強められていた時期に当たっていたのだった．1961 年に工技院が団地化のペーパープランを練っていた頃，政府はすでに閣議で，あえて首都圏に置く必要のない機関の移転を決め，行き先として筑波地区を指定した．

もちろんそのマスタープランでは各研究所の自発性や所員の個人的な事情等は全く考慮されず，以後 1972 年 2 月に至る期間，労働組合を中心とした「団地化反対運動」が活発に繰り広げられることとなる．その推移は，組合側の視点からではあるが，「大地に刻む – 地質調査所労働組合 25 年史」（地質調査所分会 25 年史編集委員会，1976）に詳しい．

変容―試験所から研究所へ

「今の工技院傘下の試験研究所の中で，確実に生き残れるのは計量研究所と地質調査所だけだ．計量研は日本がメートル法を捨てない限り，地調は地球が木っ端微塵にならない限り，研究対象も存続意義もあるが，他の試験研究所はどうなるか判らない．一括りに再編されても，その後はどうなるのか．誰も責任を持った方向は示そうとはしない．」

団地化反対運動の初期から，このような声はそこかしこから聞こえてきていた．事実，他の試験研究所が試験・検査等の現業部門を源流に持つ工学部系組織だったのに対し，地調は鉱業振興を唱ってはいるものの，手法は極めて理学部的で，1956 年の科技庁発足時には，通産傘下からの離脱・移行の噂が飛び交った程，異色の存在であった．「経済的に引き合わないのは百も承知の上で，国としてやらなければならない基礎研究には敢えて挑戦する．」と先輩が事あるごとに述べていた通りで，基本業務の根幹は，日本全土の地質図の作成や，大規模資源データベースの走りとも言える日本鉱産誌の編纂など，およそ地味なものであった．

幸い各機関とも，筑波移転と機構改組との間には 10 年以上の時間差があり，地球も木っ端微塵にはならずに済んだが，地調自体は新生・産総研の一要素として組み込まれ，大きく変容して今日に至ることになった．

研究所の主体となる研究員の構成も，移転と並行して問題になっていた．戦争中や戦後の混乱期に入所した職員の中には，研究者としての基礎訓練を受ける機会に恵まれなかった人達も居て，昇格時に十分な評価を受けられないおそれがあった．労働組合ベースでも，研究体制委員会・賃金専門委員会等を通じて処遇の改善に努め，研究グループ制度を通じて成果が正当に評価される環境を整えたりしていた．その帰結として，外部の大学や研究法人との人的交流も，近年では多くの実績を上げつつある．

一方，「地調が筑波に行ったら困る．」と言った声もあった．中心は，外部からの資料室の利用者で，その豊富な蔵書とデータの恩恵を受けていたからである．しかし所員側から見れば，資料室なしでの研究活動はとても考えられない．残念ながらこの要望には直ちに対応出来ず，複写サービスを立ち上げるしかなかった．

FAX じゃあ顔色までは判らない—エピローグ「今でさえ外勤は大変だ．筑波に移ったらどうなることか！」

至極もっともな質問が組合交渉の席上で出たことがある．

対する総務部長は少しも騒がず，「これからは FAX の時代ですよ．一々都心まで出向かなくても，デスク周りで一切の用が足りるのが筑波です．」と切り返してきた．まだ，スマホもインターネットもなかった時代のやりとりである．

さて，実際に筑波に移ってみると，ことは複雑であった．昼食を終えて都心に出るためには，13 時台に 1 本しかない普通列車を，荒川沖駅で捉まえなくてはならない．その車内では，毎回のように総務部長と顔を合わせた．

「おや？今日も部長は外勤ですか？ FAX は故障してるんですか？」昔の経過があるので，ついつい憎まれ口が出た．

部長は破顔一笑．「君ねえ，FAX じゃあ相手の顔色までは判らないでしょう？交渉事だもんね！」

みごとな応酬に，私は返す言葉もなかった．そして，改めて，研究と行政との間の深い隔絶を感じ取っていた．（了）

注1　研究団地化計画：首都圏に点在する試験・研究所をまとめて建て替えるという通商産業省工業技術院の計画

文　献

地質調査所百年史編集委員会（1982）地質調査所百年史．地質調査所，162p.

地質調査所分会 25 年史編集委員会（1976）大地に刻む－地質調査所労働組合 25 年史－．全商工労働組合関信支部地質調査所分会，399p.

SAKAMAKI Yukio（2019）GSJ's historical transfer to Tsukuba 6: Reminiscences – Changes in laboratory and office conditions related with GSJ's transfer to Tsukuba.

（受付：2018 年 8 月 8 日）